

ISSN 0910 - 2396

野鳥友刊

—北海道—

第 64 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 昭和61年 6月21日



フクロウ 1985. 6. 23 江別市野幌森林公園 撮影者 佐藤 康雄



もくじ

私の探鳥地(石狩浜)-----	黒田 晶子 ---	2
イスカによるカラマツ種子の食痕 --	斎藤新一郎 ---	3
鳥声録音の奨め-----	小山 政弘 ---	4
北海道のオオジシギの分布-----	藤巻 裕蔵 ---	5
聞きなしの民話(2)人里と草原の鳥 ---	武沢 和義 ---	6
昭和61年度総会経過報告-----		7
探鳥会報告 -----		8
鳥学コーナー -----		11
探鳥会案内 -----		11
鳥民だより -----		12

私の探鳥地 ⑤

石狩浜、わが家をブラインドにして

黒田 晶子



石狩川河口の本町に入るすこしてまえ、海と川にはさまれた細道い砂地に、私をはじめて旅のテントを張ったのはいまから7年まえの6月。はげしい風と、波と、カエルの合唱に圧倒されて眠ったあくる日は、草かげを出入りするシロチドリ、雛や、イソシギの賑やかな追いかけてを眺めてすごしました。テントのひもにコウボウシバなどの長い葉が巻きついてとれないのを、風のいたずらか、人のいたずらか、いぶかったりしてー？

いずれのいたずらだったにせよ、テントを張った地にこうして手づくりの家をたてて暮らすことになりましたが、暮らしは何だかテント時代とあまりかわりありません。ソラノ鳥の声がきこえた、といっちは窓ぎわに立ち、ときによって雁であったり、白鳥であったり、アオアシシギや、チュウシャクシギであったりするその影を追い、屋根をこえるのを仰いでから、急いで反対側の窓へ走って(四方に窓があいているのでいそがしい)見おくと、という具合です。

西は海までの間に小さな沼をひかえ、北の窓側には柏の海岸林の片鱗をのこすこの家の、鳥経験はけっこうスリルにみちいて、嵐のあとにトウゾクカモメが飛んでいたり、元旦から海側正面にオジロワシが控えていたり、渡りの季節にはミヤコドリが浜に佇んでいたり、なかなか油断がなりません。

それが6月の朝ですと、私はまず暗いうちから、カッコーの声に起こされます。その緊迫した大声は、とても「春眠あかつきを覚えず」どころではありません。カーテンのかげからのぞいてみると、案の定、二羽の鳥が翼

を垂らし、尾をキリキリと高くあげた緊張した姿勢で鳴きかわし、しきりに移動しあい、蝶のようなもつれ飛びを演じ、時にくちばしに木枝か何かの小片をくわえたりしています。潮騒をバックに、アカハラ、ヒバリの声も響きます。空が明かるむにつれて、アカモズの背が照りはえ、ノビタキの紋付きがアレチマツヨイグサの茎を飛びかいます。砂丘のかげの、古い杭にとまっているのは、チゴハヤブサです。そろそろ朝食のしたくを、と思って流しに立つと、二羽のカモが沼におりるのが見えました。肉眼でも白い肩斑がオーバーなつけまつげのように顕著な、シマアジで、二、三日まえにここで確認したものです。この沼には、先日数日強風がつづいたあとに、五羽のヒレアシシギが降りていました。夕方にはカイツブリの声も聞こえました。

浜の野原の常連は、既述のほか、ハクセキレイ、ノゴマ、コヨシキリ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、シメ などです。沼の周辺が乾いて柳がひろがるにつれて、シロチドリ、シマセンニュウは来なくなりました。

いま石狩町は、わが家のとなりに火葬場の新改築を計画中です。江戸時代のやしろや古い歴史の名残りとどめる河口の一画に、自然の築いた砂丘を崩して、二百坪の建物をうちたて、海水浴客の背後に高い煙突をニョッキリ立てる構想は、石狩浜のイメージと自然の破壊にもつながります。町は、周辺の町内会の反対を押しきって実行する構えのようです。石狩浜を愛する方々、どうぞわが町内会にご声援をねがいます。

☎ 061-33 石狩町親船74

イスカによるカラマツ種子の食痕

斎藤 新一郎

「冬を歩く」ということで、2月下旬に、札幌市の豊平区にある、西岡水源池の森林をスキーで歩いた。その入口で、バードウォッチャーが集まり、カラマツ並木を見上げていた。イスカが、カラマツの種子を食べにきていたのだった(図-1)。

同行者たちが見上げている間に、私は雪の上に落ちてきた、カラマツの種子を拾った。イスカの食痕を確かめたかったのである。

カラマツの種子は、秋に熟し、球果の種鱗が開いて、風散布される、有翼種子である。けれども、熟しても、秋にすべての種子が散布されてしまうのではなく、冬になっても種子が残っている。上向きの球果は、なかなか種子を自由にしないのである。

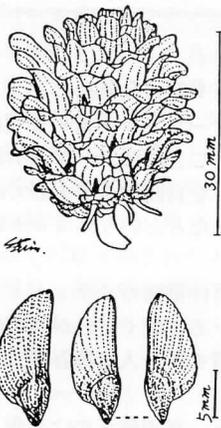


図-1 カラマツの球果と種子

種子の散布期間の長いことは、種子の着地・発芽条件が多様性をもつことになって、その樹種の生存に好都合である、とみられる。

いま北海道に生育する針葉樹のおもなものをみると、次のようである。

樹種	種子の散布期
トドマツ(モミ)	秋*
エゾマツ(トウヒ)	秋~冬(~春)
アカエゾマツ()	秋~冬(~春)
カラマツ(植栽)	秋~冬(~春)

* 球果が秋に崩壊する、鳥散布もある

このように長い期間にわたる種子散布は、種子を食物とする鳥類、とくにイスカにとっても、たいへん好都合である。もし、トドマツ(モミ)型の種子散布であると、イスカは冬を越せなくなってしまう。

なお、ヨーロッパには、3種のイスカが生息していて、それらが食物とする針葉樹の種子はそれぞれ異なっているようである。つまり、それらのくちばしの大きさと、針葉樹の球果の種鱗の厚さとの関係する、とみられている。

鳥種	くちばし	樹種	種鱗
ハシブトイスカ	大	アカマツ*	厚い
イスカ	中	トウヒ*	中
ナキイスカ	小	カラマツ*	薄い

*ヨーロッパ産のもの

カラマツが本州から導入された植栽樹種であり、トドマツ(トドモミ)が主要な針葉樹であることから、北海道の森林には、イスカの食物はあまり豊かでない、といえる。

さて、雪面に落ちてきた種子(の殻)は、見事に2つに縦割りされ、中味(胚乳と胚)が食べられてしまっていた(図-2)。

この食痕は、私には、十勝三股でみたイタヤカエデの翼果の食痕と同一の鳥によるものではなかろうか、と思われた。

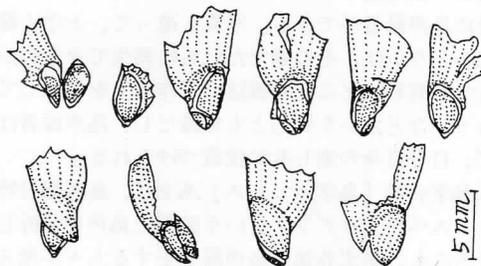


図-2 イスカによるカラマツ種子の食痕

枝上に残された球果には、やはり、イスカの鋭いくちばしによる痕跡が残っているのであろうが、今回は確めないうで終わった。

参 考 文 献

- 樋口広芳、1984. 種分化と資源分割・森岡弘之ほか編著「現代の鳥類学」、P.216~236、朝倉書店、東京。
川辺百樹、1984. なぜイスカは大雪山国立公園に少ないか。ひがし大雪だより、12:3。
斎藤新一郎、1982. 針葉樹のたね。北林試季報、54:29~35。
斎藤新一郎、1985. イタヤカエデの翼果を食べたのは誰か？ ひがし大雪だより、13:12。
BANG, P., DAHLSTROM, P. and VEVERS,

- G., 1974. Animal tracks and signs. 240 pp., Collins, London.
HAAVIST, V.F., 1978. Lowland black spruce seedfall: viable seedfall peaks in mid-April. Forestry Chronicle, 54:213~215 (斎藤新一郎抄訳、1979. マリアナトウヒは4月に種子をまく。林、327:40~41)。
HEINZEL, H., FITTER, R. and PALSLOW, J., 1972. The birds of Britain and Europe with North Africa and the Middle East. 336pp, Collins, London.

〒079-01 美唄市光珠内町東山 北海道林業試験場

鳥声録音の奨め

小山 政弘

屋外は猛吹雪。ストーブ赤々に燃やし、ウイスキーグラス握りながらステレオに耳を傾ける。一心に聴き込んで悦に入っているのは、この夏録音した釧路湿原のシマアオジの歌。

こうして増幅して聴くと、野外録音の楽しみは何十倍にも大きくなる。とも角楽しい。

鳥をカメラで追いまわす人口が増え始めたので、私はイヤ気をさしてほとんど撮らなくなった。ホコリをかぶって眠っている 400 ミリや 600 ミリレンズを尻目に、時折持ち出すのはカメラではなくて、ポータブル・テープレコーダー。集音器と外部マイクロフォンも忘れない。今は安価で高性能なカセットコーダーが売られているので手軽に鳥声録音ができる。写真と違って、上手く録音できたかどうかは、その場でただちに再生できるのが何ととっても有利。どこぞの雑誌に「作品」を発表して名を売ろう、などという野心とも無縁だし、鳥声録音はひとまず、自分自身の楽しみに位置づけられる。

日本鳥学会の「鳥学ニュース」No.18は、鳥声録音特集。サウンドスペクトログラフという装置で鳥声を分析して研究するにも、まず各地の鳥声録音をする人々が増えないことには・・・とヤンワリ主張する。考えてみれば、私たちは鳥の姿が見えなくなっても、声の「聴きなし」で大方の鳥の種を判断できる。「小鳥」といえば「歌」とはね返ってくるほど、本来鳥とさえずり声とは密接なものだ。ところが意外にも本気で鳥声録音を手がける人が少ない。いや、結構とり組んではいるのだろうが、相互

の交流がないのかも知れない。

私がオープンテープレコーダーを肩に、シマアオジの声を録音し初めたことには、いささかわけがある。「シマアオジ気狂い」を自認する者としては、さえずりの方言はないものか、などというオカシナ研究心を持っているからだ。

先進国には、野性動物のサウンド・ライブラリーが方々に設置されていると聴く。わが国では、鳥声の場合NHKか、鳥声録音の第一人者蒲谷鶴彦氏のライブラリーしかないらしい。

写真に比べると、鳥声録音には発表して喜ぶような派手さはない。がしかし、映像記録と同じように大切な研究材料である。前述のように、録音は、写真撮影より失敗が少ないから、手軽である。私は道内の鳥声録音仲間が増えることを大いに期待したい。

サウンド・ライブラリーをこしらえることも意味あることだろう。その前に、どこの誰がどの種の鳥声を録音した、というリストを年報とすることだって、大きな意味がありそうだ。そういう、仲間の横のつながりを組織する日が早くくることを私は望む。

〒084 釧路市鶴野 58 番 釧路西高校

北海道のオオジシギの分布

藤巻 裕蔵

オオジシギは北海道では開けた環境ならどこでも見られる普通の鳥なので、それほど珍しい鳥だと考えている人は少ないと思う。ところがこの鳥は、繁殖期には北海道以外では本州北部、国後島、サハリン南部、ソ連極東南部のごく一部に分布するだけである。また非繁殖期にはオーストラリア東部の一部とタスマニア島に生息するだけで、極端に言えば、世界でオオジシギが分布しているのは日本とオーストラリアだけということになる。しかも、今のところ生息数が多く、主な繁殖地といえるのは北海道だけである。オーストラリアの研究者によると非繁殖期を過ぎオーストラリアでは最近生息数が減少しつつあり、その保護、とくに生息地の保全の必要性が考えられるようになってきている。北海道ではまだこのような傾向があるとはいえないが、主な繁殖地が北海道しかないということを考えると、この鳥の調査を行い、今後の動向について資料を蓄積する必要がある。このため北海道生活環境部自然保護課は1984年から北海道全域でオオジシギの生息状況調査を開始した。そのうち分布について2年間の調査結果からまとめてみた(図1)。

調査地は北海道全域で、1984年209カ所、1985年203カ所である。図中の線で囲まれた大区画は20万分の1の地形図に相当し、各区画を縦横とも8区分、計64区分した。すなわち、1メッシュ(丸1つ)は5万分の

1の地形図の1/4、または2万5千分の1の地形図に相当する。調査を行ったうち、オオジシギが観察されたメッシュを黒丸、観察されなかったメッシュを白丸で示してある。北海道におけるオオジシギの分布は広く、ほぼ全域にわたっているが、この図から渡島半島の南部と日高や留萌の海岸部、中央部の山岳地帯などに観察できなかったメッシュが他の地域より多く見られるのがわかる。

今のところ、まだ未調査のメッシュがかなりある。そこで会員の皆さんにお願いがあります。皆さんの観察記録を是非お送りいただきたいのです。記録は次の項目をお願いします。

- 1) 観察年月日
- 2) 観察場所：地名(できれば2万分5千分の1地形図の名前、または5万分の1地形図の場合にはその名前とそれを1/4にしたとき、A、B、C、Dのどの部分か、図2参照)
- 3) 観察場所の環境：例えば、海岸、河川敷、畑、水田、牧草地、放牧地、植林地、湿原など。
- 4) 観察者氏名、住所
送り先：080 帯広市稲田町 帯広畜産大学
藤巻 裕蔵

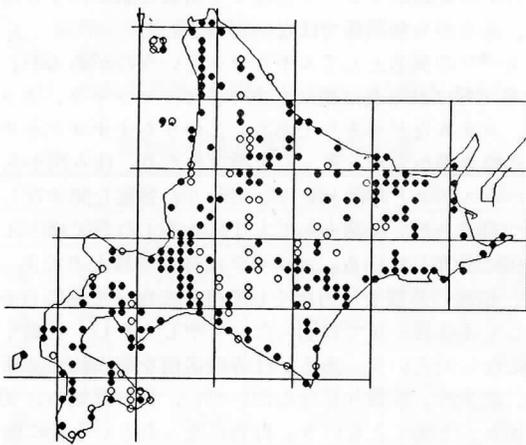


図1 北海道のオオジシギの分布、説明は本文参照

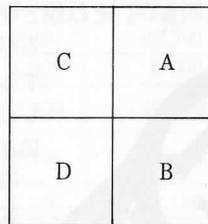


図2 5万分の1地形図の場合

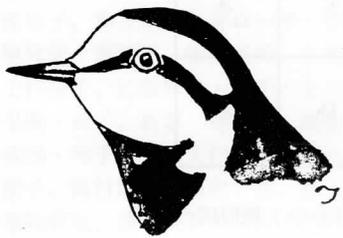
聞きなしの民話 (2)人里と草原の鳥

武沢 和義

美しい鳥といえば、私たちはカワセミやアカショウビンのように色彩の鮮やかな鳥をまず思い浮かべる。森林の鳥としてはオオルリやキビタキ、草原の鳥ではノゴマやツマメアオジといったところであろうか。しかし民話の世界では、これらの鳥が美しいと評価されることは、ほとんど無い。美しい鳥として最も頻りに登場するのはアカゲラとツバメである。民話は不思議の国の世界を描くのを本質とするが、その反面、実生活の中で語るということを非常に大事にする。だから民話に登場するのは、身近かにいる鳥か自分たちの生活に関わりのある鳥に限られてくる。

鳥の出る民話は、動物昔話と分類される話がほとんどで、その動物の姿や生態の由来を説明しようとするものである。

「雀孝行」という話が日本全土にわたって分布している。昔、スズメとツバメは姉妹であって、二人とも奉公に出ていたが、ある日、親が急病になったという知らせがとどいた。そのとき、スズメはお歯黒をつけている最中であつたが、途中でやめてあわててとんで帰り、臨終に間にあつた。しかしツバメは紅白粉をつけて着物を着かえてから出かけたので間にあわなかつた。それでスズメはクチバシが半分黒くなったままであるが、神さまから米を食べて人家の軒下に棲むことを許される。それに対してツバメは、姿こそ美しいけれども、泥で巣をつくり虫を食わねばならなくなつて、今でも「土食て、虫食て、しーぶい」と鳴きながら飛んでいるという。この聞きなしには地方差があつて「出雲の国じゃ、粥食う、ゆう食う。この国じゃ土食う。やーれ口まずい、びー」のように複雑なものもある。日本中どこに行つても姉妹の一方はスズメであるが、もう一方はアカゲラとして語られる場合も多い。但し、アカゲラの名が出てくることは無く、キツツキの古名であるケラツツキやテラツツキの名が使われることが多い。その他となると数はずっとへ



るが、カワセミが登場することもある。しかしこれは九州の南部に局在しており、あまり一般的ではない。

私たちは、森林の鳥とか草原の鳥という分類をするけれども、昔の農民にとって草原の

鳥は、職場の鳥そのものであつた。中でも一番馴みの深かつたのはヒバリである。ヒバリの聞きなしとして知られているのは、「利取る、利取る」や「日一步、日一步」のように金貸業者の用語が多い。ヒバリの鳴き声はさわがしく、高い所からいかにも何かを催促しているような感じを与える。この感じがヒバリを「借金トリ」にしてしまったのではないだろうか。民話に出てくるのも「ヒバリ金貸し」という話である。昔、ヒバリは金貸しであつて、ある時お日様に金を貸した。しかしお日様は何のかんのといいのがれをして、仲々金を返さないで、ヒバリは空高く舞い上がつて鳴きながら、お日様に返金の催促をしているのだという。その声が聞きなしとしてたくさん残つており、前にあげたのを除くと、「かし金貸金」、「損じゃ、損じゃ」、「貸よこせ、がかよこせ、子たこせ」、「五斗五升返えせ」、「一升貸して二升取れ」などというのがある。金を貸した相手がウズラというのもある。ヒバリが催促に行つても、ウズラは「アジャバー」と、とぼけているばかりで、さっぱり返さなかつたという話でもあれが面白いのだが、残念ながらそれは無く、ウズラ切ながつて「くぐつつ」と鳴いているだけであつたという。何はともあれ、「ヒバリ金貸し」の話はどこで語られる場合でも底抜けに明るく、古典落語の大晦日に借金取りを適当にごまかして逃げてしまうという話を連想させて面白い。元々、古典落語には、民話の中の笑話モチーフとなつて出来た話がたくさんあり、ありがち無関係ではないだろう。

ヒバリの異名としてムギウラシというのがあるが、この名で呼ばれる鳥は他にもあり、オオヨシキリ、カッコウ、ヨタカなどがそうである。このうちオオヨシキリはその鳴き声からギョギョシと呼ばれたり、住み所からヨシハラスズメと呼ばれたりしており、豊富な聞きなしを持つ鳥である。民話としても「行々子」の名でほとんど全国に分布している。ヨシキリは寺の草履とりであつたが、和尚の草履を片方なくして打首になつて鳥になる。そして「草履一足で首切つた、くやくやくし」と鳴くようになったという。あるいは寺の名前を取入れて「常光寺、常光寺。草履片足なんだいだい、切らば切れ、切らば切れ」と鳴くともいう。打首になつたという割に暗い感じが伴わないのは、オオヨシキリのあの声のさわがしさが原因とも思えるが、昼間鳴く鳥ということの方がより大きな原因と思う。

〒064 札幌市中央区南4条西26丁目

昭和61年度 総会経過報告

と き 昭和61年4月19日(土) 午後2時～3時30分
 ところ 札幌市民会館会議室

小堀代表幹事による開会のことばあり、野会長のあいさつのもと議長に柳沢副会長を選出し、審議が行われ原案どおり可決されました。

(議 事)

1 昭和60年度事業報告

(総 務)

- (1) 野鳥写真展の開催(於 開拓記念館、三菱信託銀行札幌支店)
- (2) 新年懇談会の開催(於 婦人文化会館)
- (3) 絵はがきの作成と配布
- (4) 傷害保険の更新
- (5) 定例幹事会の開催(12回)
- (6) 野鳥だよりの発送(4回)

(探 鳥)

探鳥会の開催(17回、延べ参加人員515名)

(広 報)

野鳥だよりの発行(60、61、62、63号)

2 昭和60年度会計報告(別表のとおり)

なお、絵はがき作成に伴う特別会計については、作製費総額が697,818円で一般会計から550,400円借り入れ5,500部を作製し、販売代金として164,794円を一般会計に返済し、現在絵はがきの残が2,576部ある旨報告があった。

3 昭和60年度会計監査報告

野村氏から適正に執行されている旨の報告があった。

4 昭和61年度事業計画

(総 務)

- (1) 野鳥写真展の開催(ふれあい広場さっぽろ、三

菱信託銀行札幌支店)

- (2) 傷害保険の更新
- (3) 定例幹事会の開催(12回)
- (4) 野鳥だよりの発送
- (5) 新年懇談会の開催

(探 鳥)

- (1) 探鳥会の開催(1泊探鳥会を含め17回)
- (2) 探鳥会記録総括表の昨成(これまでの探鳥会の記録の集大成、分析)

(広 報)

野鳥だよりの編集及び発行(64号～67号)

5 昭和61年度予算案(別表のとおり)

6 役員選出

役員選出について、新宮康生氏、長谷川涼子氏、紅林雅文氏、萩千賀氏、羽田恭子氏、猿子正彦氏の退任に伴い、新幹事に井上公雄氏、竹内強氏、福岡研也氏、三木昇氏を選出し、引き続き第1回幹事会を開催し、次のとおり役員を決定した。

会 長 荻野寿衛吉

副会長 谷口一芳、柳沢信雄

監 事 野村梧郎、大坊幸七

代表幹事 小堀煌治

会計幹事 柳沢千代子

総務幹事○白澤昌彦、片岡秀郎、清水朋子、柳沢千代子(兼務)、小堀煌治、三木昇、富川徹(兼務)

探鳥幹事○戸津高保、井上公雄、関口健一、竹内強、富川徹、中野高明、早瀬広司、福岡研也、小堀煌治、渡辺紀久雄、渡辺俊夫

広報幹事○霜村耕一、岩泉ゆう子、武沢和義、道川富美子、村野紀雄、渡辺紀久雄(兼務)

(○印は各担当の代表者)

昭和60年度決算書・支出の部

	決 算 額	予 算 額	摘 要
印刷費	361,800	468,000	野鳥だより
通信費	166,530	200,000	だより発送 探鳥会PR他
会議費	107,523	110,000	総会・幹事会・ 新年懇談会
消耗品費	17,165	40,000	コピー・事務 用品
賃 金	9,480	20,000	だより発送 運搬代・他
報 償 費	124,340	150,000	探鳥会手当 事務所謝礼・他
その 他	573,115	382,000	絵はがき・保険 写真展・他
合 計	1,359,953	1,370,000	

昭和60年度決算書・収入の部

	決 算 額	予 算 額	
繰越金	460,370	460,370	
個人会費	554,000	630,000	370人
団体会費	9,000	22,500	
寄付金	1,000	5,000	2件
参加費	39,500	40,000	新年会・藤の沢 探鳥会
売上金	468,186	205,000	野鳥だより・タ イピン他
雑収入	18,552	7,130	利息他
計	1,550,608	1,370,000	
会費受分	72,000	0	
合 計	1,622,608	1,370,000	

昭和61年度予算書・支出の部

	予 算 額	摘 要	
印刷費	420,000	野鳥だより 封筒他	320,000 100,000
通信費	200,000	だより発送 探鳥会P・R他	150,000 50,000
会議費	110,000	総会、幹事会 新年懇談会他	60,000 50,000
消耗品費	40,000	コピー、事務用品	
賃 金	20,000	だより発送	
報 償 費	150,000	探鳥会手当 幹事手当 事務所謝礼他	40,000 40,000 70,000
雑 費	200,000	保険、写真展 (予備費)	
合 計	1,140,000		

昭和61年度予算書・収入の部

	予 算 額	摘 要
繰越金	190,655	
個人会費	630,000	1,500円×420人
団体会費	22,500	4,500円×5団体
寄付金	5,000	
参加費	40,000	新年懇談会 藤の沢探鳥会
売上金	250,000	野鳥だより 絵はがき他
雑収入	1,845	
合 計	1,140,000	



藤 の 沢

61.1.26

〔記録された鳥〕 ヤマゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ウツ、シメ、スズメ、カケス、ハシブトガラス 以上11種

〔参加者〕 長谷川涼子、岩泉ゆう子、曾根モト、宮野巴里子、松井 冒、野口正男、佐々木武巳、竹内 強、戸津高保・以知子、田中礼子、羽田恭子、飯田秀明、山内すみ、大坊幸七、井上公雄、松館光雄・弘昌、松井由紀子、柳沢信雄・千代子、園部恭一、品田延一、牧田栄子・香織、佐藤 勝・敏子・千春、武沢和義・佐知子、鹿島懐策、谷口一芳・登志、泉屋宣志・恵津子、塚原英代、小沢広記、上村優子、佐藤輝夫・昌子・北斗、宮田忠義・貞子、新妻 博、辻 尚美、塙威郎・玲子、熊木大仁、酒井祐一、清水朋子、霜村耕一、深沢 博、渡辺照彦、福岡研也、道川富美子 以上55名



〔担当幹事〕 戸津高保、長谷川涼子、道川富美子

探鳥会に参加して(野幌)

61.2.16

星野 加奈

私は2月16日の、野幌森林公園の探鳥会に初めて参加しました。私が鳥に興味を持ち始めたのは、去年の六年生の初めごろです。鳥の図鑑を見て、自然に生きる鳥の姿に感動して「今年は、もっといろいろな鳥を詳しく覚えよう。」と思っていました。ある日新聞で探鳥会の事を知り飛びはねて喜びました。

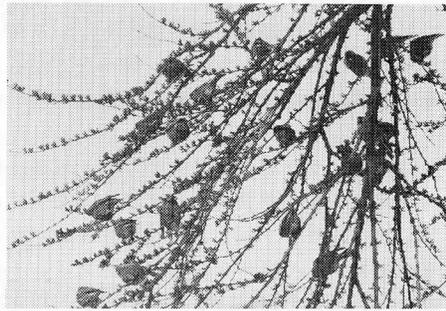
冬の森林公園は初めてなので、厚着のスタイルでお弁当を持ってまるで学校の遠足の様な気持ちで参加しました。はりきってでかけたのですが、見知らぬ人ばかりで最初はきん張してしまいました。でも話をかけてくれたり双眼鏡をかしてくれたり、とても親切にいただきました。

「ホラ、見てごらん。」とおじさんに言われ、初めて見た鳥はハギマシコです。雪の上を泳ぐ様にして木の実をついばんでいるのが見えました。ヤマゲラ、ハシブトガラ、ゴジュウカラ、ヒレンジャク…etc。16種類もの鳥を見る事が出来ました。冬でも、こんなに多くの鳥が森林の中で生きているのを知り、驚いてしまいました。

双眼鏡を通して、まのあたりにした鳥たちの姿は、色あざやかにあるいはしづい色でかわいらしくて今も目にやきついています。

冬の探鳥会だったから、もう一つの発見がありました。真っ白な雪の上に点々とついている動物の足あと。キツネ、野うさぎ、野ねずみといろいろな動物が、この森林の中で厳しい冬を過ごしているのに改めて感動しました。

帰り道は、とてもすがすがしい気持ちでいっぱいになりました。



ハギマシコ(P.L 柳沢千代子)

中学生になっても、この探鳥会に参加していきたいと思えます。

〔記録された鳥〕 オジロワシ、ヤマゲラ、アカゲラ、コゲラ、ヒヨドリ、ヒレンジャク、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ハギマシコ、ウツ、カケス、ハシブトガラス、ワシタカsp、ヒワsp、以上17種

〔参加者〕 堀川 登、福岡研也、永井 愛、白沢昌彦、戸津高保、井上公雄、田辺 至、杉田範男、松館弘昌、福田正彦、矢野恵里、星野裕子・加奈、大衛則雄、竹内強、長谷川涼子、渡辺紀久雄

〔担当幹事〕 戸津高保、渡辺紀久雄

〒004 札幌市白石区厚別東2条5丁目18-11

(12才)

円山公園

61.3.2

矢野 恵里

その昔、古事記の時代より、鶯(ぬえ)と呼ばれ、人々に忌み嫌われてきた鳥、トラツグミが2羽姿を現した。エサ台のリンゴをついばんでいたその姿は、黄色と黒と白のだんだら模様の大きな体につぶらな黒い瞳で、とても化け物とは言えぬ程愛らしく感じた。

実は私は、前に一度ここでトラツグミに出会っている。今年初めて円山に来た“初探鳥”の日であった。寅年の初めにトラツグミに出会えるなんて、今年はきっと良いことがあるに違いないと、嬉しく思った。さらにつけ加えると、私は阪神タイガースの10年来のキチガイであり、生まれも寅年の年女である。これだけ虎づくめの私が、今年の初めにトラツグミに出会えたのだから、もしかしたら我が阪神が今年も優勝するのかもしれない。それと



ヤマガラ(P.L 白沢 昌彦)

も、コウノトリが赤ん坊を運れてくるように、トラツグミがお婿さんを運れてくるのかな?

この探鳥会の5日後、私はまた円山に来た。エサ台のところには、またもヤトラツグミがいた。このトラツグミは、怠慢でエサを探すのが面倒で、エサ台に根づいてるだけなのかと、今回は疑惑の目を向けた。トラツグミ君、少しシェイプアップをしないと、飛べなくなるよ。今度は、その奇声を私に聞かせてね、と別れを告げた。

〔記録された鳥〕 ヤマゲラ、アカゲラ、コゲラ、ヒヨドリ、キレンジャク、トラツグミ、ツグミ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、カワラヒワ、マヒワ、ハギマシコ、ウソ、シメ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ワンタカ sp、以上21種

〔参加者〕 曾根モト、矢野恵理、杉田範男、石川岳史、戸津高保・以知子、河端賢一・はつえ、武沢和義・佐知子、富川 徹、村山 剛、道川富美子、松館弘昌、佐々木武巳、長岡英夫、伊沢雅子、山田甚一、福岡研也・玲子、田中礼子、星野加奈、後藤美尾、永井 愛、岡田トヨ子、横谷 茂、泉屋宣志・恵津子、高柳信子、井上公雄、柳沢信雄・千代子、吉田公彦、久我 通、野口正男、竹内 強、谷口登志、山田れい子、山崎カツエ、以上39名

〔担当幹事〕 富川 徹、戸津高保

〒001 札幌市北区屯田3条1丁目5-1

ウトナイ湖

61.3.30

渡辺紀久雄

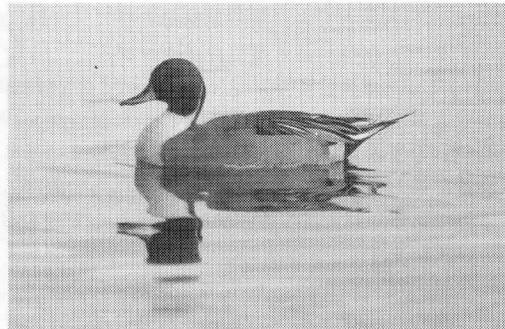
3月のウトナイ湖は、ガン・カモ類やワシ類も集まるとともにぎやかです。11月もウトナイ湖で探鳥会を行っていますが、3月の方が種類も数も多く、楽しい探鳥会です。ただ、3月のウトナイ湖はまだ寒く、冬の服装が必要です。この日は天気はくもりでしたが、寒さは普通といったところで、ウトナイ湖の水面は、まだ半分よりやや多いかなあと思う程度氷っていました。

10時にレイクホテル側に集まって、いつものようにトキサタマップから観察を始めました。この辺は、風が冷たいけれど、結構、珍しいトリがいたりします。この日は、西の方からガンが列をなして飛んできました。よく見ると、群れの中で大きさが違うものが混じっており、マガンとヒシクイが混じって飛んでいると思われました。雁行を見たことのある人もガンを初めて見た人も、それぞれ空を列をなして飛ぶガンたちに見とれていました。ここでは、ほかにアオサギやオオジュリンなどが現れました。

トキサタマップから、レイクホテルの方に戻り、湖岸に沿って、ネイチャーセンターの方へ歩きましたが、途中、オナガガモやハクチョウたちを間近で見たり、アメリカヒドリをやっとみつけては喜んだりしました。

例によって、ネイチャーセンターの中で、昼食をとらせてもらい、各自センターの望遠鏡で遠くのカモやワシを観察したり、センターの展示物を見たりしました。この日は、他の支部や一般の人たちの入館が多く、センターの人たちも忙しそうでした。

湖面の氷が解けるには、まだ日数がかかりそうでしたが、ヒバリやオオジュリン、ホオジロなどが観察され、湖岸にはフキノトウが顔を出すなど、どこかしら春が近づいてくる気配を感じた3月のウトナイ湖でした。



オナガガモ (P.L.霜村耕一)

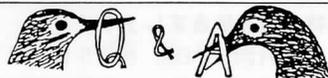
〔記録された鳥〕 アオサギ、マガン、ヒシクイ、コバクチョウ、オオバクチョウ、コバクチョウ、マガモ、カルガモ、コガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、ミコアイサ、ウミアイサ、カワアイサ、トビ、オジロワシ、オオワシ、ノスリ、ツルシギ、ユリカモメ、カモメ、アカゲラ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ホオジロ、オオジュリン、アトリ、マヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上42種

〔参加者〕 石谷義一、井上公雄、黒田 毅・由規子、小山賢一郎、佐々木武巳、菅原君代、関口健一、園部恭一、曾根モト、竹内 強、谷口一芳・登志、戸津高保・以知子、永井 愛、長岡、長谷川涼子、羽田恭子、福岡玲子、星野義直・加奈、松館 昌、道川 弘・富美子、柳沢千代子、山崎カツエ、若本秋子、渡辺紀久雄

〔担当幹事〕 関口健一、渡辺紀久雄

〒004 札幌市豊平区月寒東5条16丁目11-1

朝日ハイツ1-201



問 鳥の調査方法としては、どんな方法があるのでしょうか。

答 鳥の調査となりますと単なる観察にとどまらず、学術的な意義をもつと思います。

北海道では特定開発事業（一定規模以上の開発行為）が行われる場合、環境アセスメントいわゆる北海道環境影響評価条例・指針に基づき、事業者は道に対し環境影響評価書を作成・提出しなければならないことが義務づけられています。

動物に関する調査指針は簡単にいえば「現在、どのような動物がどこに、どの程度分布しており、開発行為によってどのような影響が予測されるのか」という事が主たる目的になっています。そこで、鳥類調査の場合、（他の動物についても同様）、条例・指針ではこれら調査方法について具体的な指定はないのですが、通常多くの研究者などによって一般的に用いられている以下の方法が実施されています。

① ラインセンサス法

もっとも多く用いられる方法で、開発予定地が森林あるいは草地である場合に有効で、主な環境タイプ別に調査帯（調査ルート）を設定し、一定の速度（通常 $2\text{ km/h} \sim 4\text{ km/h}$ ）で歩きながら調査帯（片側 25 m または 50 m の幅）の範囲内に出現（姿、さえずり、地鳴き）した鳥の種類、数などを記録していく方法です。…（記録にはこの他に雌雄、鳴き声（ソングとかコ

ール）、距離やその時の状態などをメモしておくとい）

この方法により、出現する鳥類の時間当たり・面積当りの数・優占度がわかってきます。

② 定点観察法

開発予定地に湖沼や池などがある場合、あるいはそこが海に隣接してある場合などに用いられ、湖沼などを一望できる観察地点を設定し、鳥の種類、数などを記録する方法です。この方法は主に群れとなる鳥の算定などにも摘要されますが、湖沼や海（浜辺を含む）では水鳥類の観察が主体となります。

③ 聞き取り・資料調査

現地の調査だけでは、その地域に生息するすべての鳥類が確認されるとはいいがたいため、地元の野鳥愛好家や鳥獣保護員および地元で詳しい研究者などから情報を聞き込み、また開発地域およびその周辺での既存の資料を収集し、調査を補完します。

以上がおもな調査方法の概要ですが、その他、地域内をくまなく歩き、観察された鳥の種類を記録していく方法などもあります。

このように現地調査で地域の現状を把握したのち、これらの鳥類が開発行為により、どのような影響を受けるのかどうかの予測と評価を行うわけです。



〔 鷓 川 〕

昭和61年 8月31日（日）

牧場を抜けて、鷓川の河口へ出ます。干潟では、ムナグロ、アオアシギ、タカブシギなどのシギやチドリ

の仲間が見られるでしょう。またアジサシやカモメの類、ショウドウツバメやオオジュリンなども、みることができます。

午前9時10分 国鉄鷓川駅前集合

（札幌午前7時20分発 急行えりも2号）

〔 張 碓 〕

昭和61年 9月6日（土）

今年小樽市の鳥となったアオバトが、いつもの岩に海水を飲みにくる所を観察します。岩壁にはイソヒヨドリやハヤブサがみられるでしょう。またカモメ類も豊富です。

午後3時10分 中央バス札幌線張碓停留所集合

（札幌駅前ターミナル午後2時10分）

〔 鷓 川 〕

昭和61年 9月14日（日）

その年の天候によるのですが、昨年はシギ・チドリ類が非常に多くみられました。ダイゼン、ソリハシギ、エリマキシギ、コチドリなどが、みられるでしょう。カモ類や、ノビタキ・ホオアカなど草原の鳥もみることができます。

午前9時10分 国鉄鷓川駅前集合

（札幌午前7時20分 急行えりも2号）

〔 野幌森林公園 〕

昭和61年10月26日（日）

夏の鳥が去って、冬の鳥たちがその姿をみせはじめの季節です。昨年はツグミ、カシラダカ、マヒワ、ルリビタキなどと共にタカの類が何種かみられました。今年はどうでしょうか。

午前9時30分 大沢駐車場入口、または午前8時30分 百年記念塔前集合

〔野幌森林公園を歩きましょう〕

昭和61年9月21日(日)、10月5日(日) 午前9時30分 大沢駐車場入口、または午前8時30分 百年記念塔前集合

いずれの場合もひどい暴風雨でないかぎり行きます。

昼食・筆記用具・観察用具をご用意下さい。

探鳥会の問い合わせは、戸津 011-831-8636 まで



定例幹事会報告

61年4月21日(水) 18時

30分~21時

市民会館会議室 出席幹事

11名

〔審議内容〕

- 1 昭和61年度の総会の手順及び各担当から議案の説明があった。
- 2 写真展の準備及び開催に関する通知について協議した。
- 3 絵はがきの作成に係る特別会計について報告があった。
- 4 役員改選について協議した。

定例幹事会報告

61年4月2日(水) 18時30分~20時

市民会館会議室 出席幹事11名

〔審議内容〕

- 1 第2回役員会において、昭和60年度の反省及び役員について協議した事の、報告がありました。
- 2 総会に関して、具体的打ち合わせがありました。
- 3 絵はがき特別会計を一般会計に入れ変える事に決まりました。

定例幹事会報告

61年5月7日(水) 18時30分~20時45分

市民会館会議室 出席幹事8名

〔審議内容〕

- 1 6月~9月までの幹事会は第1水曜日の18時30分から何れも市民会館で行う旨報告があった。
- 2 絵はがきの販売について、会員に周知徹底させる。
- 3 野鳥だよりの各号の第1回目の編集会議は、幹事会の行われる日に設定するようにする。
- 4 北海道庁から愛鳥週間に関する事業に対して協力方依頼があり、写真展で同封されてきたポスターの掲示を行った。
- 5 写真展の進行状況について報告があった。
- 6 年間編集計画について協議した。
- 7 今年度の探鳥会の探鳥幹事の割り当てを決定した旨の報告があった。

絵はがきの頒布について

当会作成の絵はがき「北海道の珍しい鳥たち」をご希望の方は次のとおり会員価格により頒布しておりますので、お申し込み下さい。

価格 1セット250円(送料別)

払込先 札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル5階 北海道自然保護協会内北海道野鳥愛護会あて 郵便振替 小樽1-18287上記事務局において直接購入もできます)

送料

1セット	170円
2セット~4セット	240円
5セット~9セット	350円
10セット	700円

支払例

3セットご希望の方は、250円×3+送料240円で合計990円の払込額となります。

野鳥写真展を開催

バードウィーク前の4月25日から5月6日までは、札幌地下街の「ふれあい広場さっぽろ」で行いました。

また、バードウィーク期間中の5月10日~5月23日は、三菱信託銀行札幌支店で開催いたしました。いずれも展示枚数は一枚であり、次の方々から写真の提供がありました。協力ありがとうございます。

伊藤正清(ハヤブサ)、小堀煌治(コグンカンドリ、ハクセキレイ)、佐藤康雄(オオアカゲラ、カケス、フクロウ)、佐藤幸典(コウライキジ、ゴジュウカラ) 白澤昌彦(ケイマフリ、ノビタキ)、高野秀樹(アカゲラ)、竹村由男(クマガラ)、難波茂雄(マガモ)、速水藤二郎(カラフトアオアシタビ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、ミユビシギ)、柳沢信雄(アオサギ、オナガガモ、コヨシキリ、トラミグミ)、矢野利行(コウライキジ)、山田良造(コチョウゲンボウ、シロハヤブサ)、山本一(キレンジャク、ツグミ)、若林信男(コミミズク、ハギマシコ)

原稿をお寄せ下さい。

原稿が極めて不足しております。私の探鳥地、鳥学コーナーの質問、探鳥旅行記、身近な動物植物の写真とコメントなど何でも結構ですので原稿をお寄せ下さい。

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 1,500円 (会計年度4月より) 郵便振替 小樽1-18287

〒060 札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル5階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465